

社会技術研究開発事業
令和4年度研究開発実施報告書

SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム

シナリオ創出フェーズ

「ピアサポートのDX化による、新しい当事者参画医療社会
モデルの構築に向けたシナリオの創出」

北原秀治

(東京女子医科大学 先端生命医科学研究所、
准教授)

宿野部 武志

(一般社団法人ピーペック、代表理事)

目次

1. 研究開発プロジェクト名	2
2. 研究開発実施の具体的内容	2
2 - 1. 目標	2
2 - 2. 実施内容・結果	5
2 - 3. 会議等の活動	10
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	13
4. 研究開発実施体制	14
5. 研究開発実施者	16
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	16
6 - 1. シンポジウム等	16
6 - 2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	17
6 - 3. 論文発表	17
6 - 4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	18
6 - 5. 新聞報道・投稿、受賞等	18
6 - 6. 知財出願	19

1. 研究開発プロジェクト名

ピアサポートのDX化による、新しい当事者参画医療社会モデルの構築に向けたシナリオの創出

2. 研究開発実施の具体的内容

2 - 1. 目標

(1) 目指すべき姿

1. 解決すべき特定地域における社会課題（ボトルネックを含む）の概略

経験ある患者・当事者（ピア）が患者との相互扶助を行う「ピアサポート」は、患者・医療者間のコミュニケーションの溝を埋め、患者に病気への向き合い方やセルフケアのアドバイスを与えるなど、現場レベルではその有効性が確認されている。しかし、日本においてはその価値の定量的な評価がなされておらず、それゆえピアサポートへの対価が不明であり、結果ボランティアベースでの活動となっている。また、生活圏にピアサポートの場がないために参加できない患者が多く、さらに現在コロナ禍においてピアサポート実践の場がそもそも失われている。

2. 目指すべき姿（SDGs 達成のビジョン）

本研究を通じて得られる知見は、「ウイズコロナ」の社会を当事者のニーズに基づいて対策を構想するための足場となる。日米両国で経済活動の段階的緩和が始まる中、「新しい日常」「ニューノーマル」をいかに実現するかが喫緊の課題となっているが、その過程で社会的弱者を置き去りにしないためには、まず当事者の声をすくい上げ、そこにいかなるニーズがあるのかを把握する必要がある。また、市民団体やボランティア団体が政策立案に深く関与している米国の事例は、当事者・市民協働参画による主体的な問題解決を日本において、日本の特性を生かしていかに実現するかを考えるための手がかりにもなる。感染症や自然災害などと共に生きることが可能になるためには、他者を思いやり相互的な信頼に基づくコミュニティを創ることが必要である。人類がいまだ経験したことのない時代において、その指針を与えるような知見を本研究は提示できる。「ピアサポート」は医療専門職ではない経験ある患者・当事者が、患者・医療者間のコミュニケーションの溝を埋める、患者・当事者、医療者がパートナーとなる新しい医療体制の形であり、本研究グループは、この「ピアサポート」をDX化し、まずは、世田谷区、帯広市、福岡県及び大分県で実践し、同時にピアサポートの質を上げていくことで、SDGsを達成する。

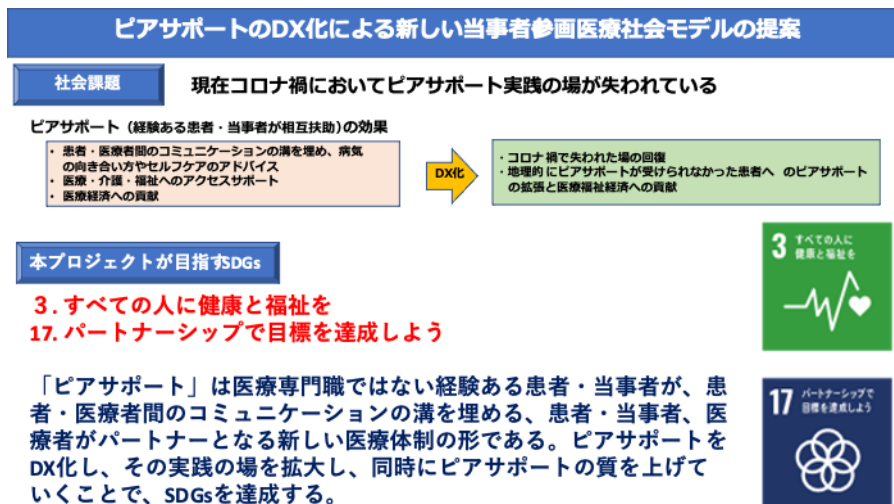
3. SDGsの総合的な活用

3-1 特に優先する目標群

本プロジェクトが目指すSDGsは次の2つが中心となる。

- 3. すべての人に健康と福祉を
- 17. パートナーシップで目標を達成しよう

「ピアサポート」は患者・当事者、医療者がパートナーとなる新しい医療体制の形である。このピアサポートをDX化し、その実践の場を地域より拡大し、同時にピアサポートの質を上げていくことで、掲げたSDGsを達成する。



3-2 相反しないように留意する目標群

計画段階ではビジョン達成のために相反するSDGsの目標群（ゴール）は見当たらない。しかし研究を進めていくなかでそれが表出してくる可能性を否定することはできない。その場合は速やかに計画の見直し等を行い矛盾が生じないようにしていく。

(2) 研究開発プロジェクト全体の目標

現実世界と仮想世界を融合させるクロスリアリティ（XR）技術を用い、ピアサポートをDX化することで、ピアサポートを享受できる患者を増やすとともに、患者の音声、表情、会話からAIを用いてピアサポートの効果を定量評価することにより改善を促せる。さらに健康度や社会参加度や医療経済に影響を及ぼすであろうと考えられるデータの定量的な貢献を示すことで、DX化されたピアサポートが正当な対価が得られ、持続可能に運用されるようなシナリオ創出を目指す。

2021年度より協力団体、患者、当事者との緊密な連携の下、帯広、世田谷、福岡の3地域でピアサポートのDX化を進めていく。その際に、ピアサポートによって表出された患者経験を、個人情報厳密に管理したうえで蓄積し、ピアサポーター養成に生かしていく。

2 - 2. 実施内容・結果

(1) スケジュール

研究開発項目	初年度	2年度	最終年度	以降
	(2021年10月～2022年3月)	(2022年4月～2023年3月)	(2023年4月～2023年9月)	
A. VRピアサポート開発				
A-1開発グループ	→		評価	
A-2実装グループ		→		
B. 機械学習導入カウンセリング				
B-1データセット作成	→			
B-2 学習モデル開発		→		
B-3 実装・評価			→	
C. 当事者参画医療社会モデル			シナリオ	
C-1調査グループ	→			
C-2実証グループ		→		

※サイトビジット11月/年
(実際は4,8,9月に実施)

↑
年次報告
(次年度計画)

↑
年次報告
(次年度計画)

↑
終了報告書
(シナリオ)

(2) 各実施内容

当該年度の到達点①

A: VRピアサポート開発

A-1 開発:

患者・当事者がXRCC（メタバース）を使用することにより抽出される課題（操作方法、ネットワーク環境、PCスペック、プログラム上のバグ、意志や主体性の顕在化、疲労度など）を元に、実際にピアサポートに使うための空間構築をシステム開発者引き続き行い、バーチャルピアサポート用のメタバースを構築した。

実施者：北原秀治（東京女子医科大学）

A-2 実装:

A-1を本研究に参加している協力当事者3団体とともに、多様な条件で参加してもらい、フィードバックから得た課題を解決したのちに、実際に修正したプログラムで作成したメタバース会場を用いて、数回の当事者（プラス研究者の主要メンバー）のみの会議を開いた。また実際のピアサポートにより、ピアサポートのどの部分がDX化にふさわしいのか社会実装を始め、3団体と共にそれぞれのプログラムを構築し、可能性試験（ソーシャルバザール、WithUsプロジェクト）を行なった。

実施者：北原秀治（東京女子医科大学）

当該年度の到達点②

B:機械学習導入カウンセリング

B-1 データセット作成:

入手可能なヒト会話データから、ピアサポートへの応用時に使用可能と予測される音情報のみと、その会話の盛り上がりラベリングし、学習用のデータセットを作成した。

実施者：三木則尚（慶應義塾大学）

B-2 学習モデル開発: (R3に引き続き)

作成したデータセットをもちいた機械学習により、音声情報から会話の盛り上がり推定するモデルを作成した。

実施者：三木則尚（慶應義塾大学）

B-3 実装・評価:

B-2で作成したデータセットをもとに学習したカウンセリング評価モデルを構築し、その研究協力者とともに汎化性能を検証した。また学習結果から、カウンセリング評価決定に支配的なデータを抽出、もしくはさらに必要となるデータを検討し、モデルの改良を続け、研究協力者が行うピアサポートに実装する（R5年5月より開始）。

実施者：三木則尚（慶應義塾大学）

当該年度の到達点③

C:当事者参画医療社会モデル

C-1 調査:

アンケートは、医療者200人、ピアサポーターと患者200人を対象に実施した。インタビューは、医療者10人、当事者20人に対して行った。また、ピアサポートにDX技術を導入している海外の先行事例の調査を実施し、現在メタ解析をすすめている。これらを合わせて、最終年度に完成するシナリオのイメージ図を作成した。

実施者：細田満和子（星槎大学）、北原秀治（東京女子医科大学）

C-2 実証：

ピアサポートにDXを導入したパイロットプログラムを作り、当事者団体による実践の検証を行い、より実効性のある改善されたプログラムを構築した（Aの①ソーシャルバザール、②WithUsプロジェクト）。これまでもピアサポートを実践してきた研究協力者と共に、プログラム要素のブラッシュアップとプログラム構築を行う。トライアルプログラムの検証はDX前後でのピアサポートの変化、経済的価値を中心にアンケートを行った。収集したデータの分析は、分析ソフト利用し、医療経済・経営学的な指標も考慮しつつ、情報共有、アンケートの結果分析を堅牢なものにしていくことをすすめている。

実施者：北原秀治（東京女子医科大学）、細田満和子（星槎大学）三木則尚（慶應義塾大学）

今年度の到達点④

A・B・C：当事者参画医療社会モデルの提唱：シナリオ作成、政策提言

シナリオ作成にあたっては、持続可能な事業モデルとするとともに、データおよび個人情報保護に関する方向性を示すための検討を重点的に行った。そしてピアサポート事業の拡大のための意見交換会の開催により、専門家や一般市民へ向けて情報の発信（HP作成および、協力3団体のHPやSNSで発信）、意見の集約を行い、ピアサポートのDX化による支援プログラムについてのシナリオを発表した。そしてピアサポートのハブとなるために、DXに関するアドバイス、教育、サポートを含め、ピアサポートDXを取り入れる団体を取りまとめるプラットフォームを構築した。当事者・市民協働参画の必要性を含むピアサポートのDX化による支援プログラムに関する政策提言はまだ③のピアサポート実証が終わっておらず、次年度へと変更とした。アウトリーチ活動としては、国内外学術誌、及び書籍として本プログラムの必要性を発信した。

実施者：北原秀治（東京女子医科大学）、細田満和子（星槎大学）、三木則尚（慶應義塾大学）、一般社団法人ピーベック、NPO法人みんなのポラリス、NPO法人学びあい

（3）成果

今年度の到達点①

A：VRピアサポート開発

A-1 開発：

患者・当事者がメタバースを使用することにより抽出される課題（操作方法、ネットワーク環境、PCスペック、プログラム上のバグ、意志や主体性の顕在化、疲労度など）を元に、実際にピアサポートに使うための空間構築をシステム開発者（MPUF榎場博文氏）と行き、バーチャルピアサポート用のメタバースを構築していった。

A-2 実装：

実装としては、協力当事者3団体とともに、実際に修正したプログラムで作成したメタバース会場を用いて、①ソーシャルバザール（帯広）、②WithUSプロジェクト（福岡）、③ピーペックカフェ（世田谷：R5開催予定に変更）を行うに至った。本実装に関して、①②の準備に要する時間が膨大であり、参画当事者の方々の精神力体力等も配慮し、③に関して5月開催とした。

今年度の到達点②

B:機械学習導入カウンセリング

B-1 データセット作成：

グループは、ピアサポートの機械学習による定量的な評価を行うために、データセットの作成を行った。当初はオンライン上で行われているピアサポート動画を用いてデータセットを作成することを計画していたが、データ数が十分に確保できないこと、また倫理審査の問題から、計画の変更を行った。また、将来的にピアサポートの評価を行う際、個人情報保護の観点から、顔の表情や会話内容を評価に用いることは難しいと考え、音声のみを用いて評価を行うこととした。

実施者：三木則尚（慶應義塾大学）

B-2 学習モデル開発：

Laboro AI社が提供している、テレビでの短時間の音声データ（LaboroTVSpeech）を用い、データセットを作成した。データセットのラベリングを、会話の盛り上がりに関して行った。人との共感について特異でない複数人の学生を雇用し、ラベリング作業を行った。共感についてはEmpathy Quotient（EQ）テストにより確認した。11,000個のデータからなるデータセットを構築した。機械学習モデル開発としては、構築したデータセットを学習させ、機械学習モデルを開発した。

実施者：三木則尚（慶應義塾大学）

B-3 実装・評価：

B-2で作成したデータセットをもとに学習したカウンセリング評価モデルを構築し、その研究協力者とともに汎化性能を検証する予定であったが、A-2における③がR5年度の5月に変更になったため、次年度に行うこととなった。

実施者：三木則尚（慶應義塾大学）

当該年度の到達点③

C:当事者参画医療社会モデル

C-1 調査：

R4に実施したピアサポートの実態と課題に関するアンケート（医療者200人、ピアサポーターと患者200人）の解析を進めた。また、実施したピアサポートの実態と課題に関するインタビュー（当事者30人、医療者5人）とそのトランスクリプトから、ピアサポートの実態をディスクリプティブに明らかにした。また、R4に実施したピアサポートと社会的処方に関するイギリスでの調査を援用し、ピアサポートが医療に参画する可

能性を論考した。

実施者：細田満和子（星槎大学）

C-2 実証：

分析と公開に関しては、R4では、ピアサポートにDXを導入したパイロットプログラムとして、（A）グループと協働で①ソーシャルバザール（帯広）、②WithUSプロジェクト（福岡）、③ピーペックカフェ（世田谷：R5開催予定）をサポートしたが、R5ではこうした当事者団体による実践の検証を行い、より実効性のある改善されたプログラムを構築する道筋を立てた。

実施者：北原秀治（東京女子医科大学）、細田満和子（星槎大学）

当該年度の到達点④

A・B・C：当事者参画医療社会モデルの提唱：シナリオ作成、政策提言

持続可能な事業モデルとするとともにデータおよび個人情報保護に関する方向性を示すための検討を重点的に行ってきた。とくに定例会議は毎月第2土曜日の12時から13時に行なっており、前年度も合計10回行なった。また、それ以外に各チームの会議や、緊急の会議、イベント前の打ち合わせ等も含めて数十回以上の会議を行い、その都度、どのように横展開していくのかを話し合ってきた。現在70%ほど完成しており、今後のピアサポート事業の拡大のために、ピアサポートのハブとなるために、DXに関するアドバイス、教育、サポートを含め、ピアサポートDXを取り入れる団体を取りまとめるプラットフォームを構築している。また、当事者・市民協働参画の必要性を含むピアサポートのDX化による支援プログラムに関する政策提言を行うために、本研究プログラムに参加する地方議員や、代表者自身が自治体や議員に対して対話をおこなってきた。いまだピアサポートのDX化による支援プログラム議員連盟を作りまでは辿り着かないが、本研究より、科学的にも、当事者団体の運営にはICT技術が有効であり、価値付けには必要であることがわかっているため、最終年度は多様なステークホルダーを巻き込みつつ、保険収載に結びつける戦略（法案等）につなげる策を完成させたい。

実施者：北原秀治（東京女子医科大学）、細田満和子（星槎大学）、三木則尚（慶応義塾大学）、一般社団法人ピーペック、NPO法人みんなのポラリス、NPO法人学びあい

（4）当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

- ・プロジェクトの目標達成に対する現在の進捗状況は概ね良好である。協力3当事者団体と三つのシナリオを作り、実装することができた。東京の分のみ、AI解析などが必要なこと、予想以上に帯広、福岡が盛況であり、回数を増やしたことにより、R5年度に持ち越しになった。うまくいった要因として、当事者および研究者の対話により研究チーム内の意思疎通がとれる様になり、一気にプロジェクトを推し進めることができた。また、本研究に関する協力者が外部より予想より多く現れ、テンポ良く進めることができた。
- ・アンケート結果より、当事者団体はICTをうまく使いこなす団体のほうが収入が高い可能性が示唆された。また、これらの実装を繰り返すことで、当事者x医

療・教育xデジタル（STI）がいかに重要で、そして社会を変えることができるのかは研究チーム全員が感じたことである。

- ・次年度の課題として、真の研究目的であるピアサポートの価値をどのようにつけるかである。今年度が開発した機械学習モデルを用いて、音声分析を行い、これがどのような結果になるのか次第で、シナリオの内容に多少の修正が加わることもあるが、概ねこの三つのシナリオを横展開していく準備をソリューションとして進めることとなる。そのための最終シンポジウムは2023年9月頃に開催予定である。

2 - 3. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
4月9日	第11回定例ミーティング	Zoom	研究進捗状況（A, B, C） 3地域の実装の準備、実施状況
5月14日	第12回定例ミーティング	Zoom	研究進捗状況（A, B, C） 3地域の実装の準備、実施状況
6月9日	第13回定例ミーティング	Zoom	研究進捗状況（A, B, C） 3地域の実装の準備、実施状況
7月9日	第14回定例ミーティング	Zoom	研究進捗状況（A, B, C） 3地域の実装の準備、実施状況
8月13日	第15回定例ミーティング	Zoom	研究進捗状況（A, B, C） 3地域の実装の準備、実施状況
9月10日	第16回定例ミーティング	Zoom	研究進捗状況（A, B, C） 3地域の実装の準備、実施状況
10月8日	第17回定例ミーティング	Zoom	研究進捗状況（A, B, C） 3地域の実装の準備、実施状況
11月12日	第18回定例ミーティング	Zoom	研究進捗状況（A, B, C） 3地域の実装の準備、実施状況
12月10日	第19回定例ミーティング	Zoom	研究進捗状況（A, B, C） 3地域の実装の準備、実施状況
1月14日	第20回定例ミーティング	Zoom	研究進捗状況（A, B, C） 3地域の実装の準備、実施状況
3月11日	第21回定例ミーティング	Zoom	研究進捗状況（A, B, C） 3地域の実装の準備、実施状況
4月19日	ソーシャルバザール定例ミーティング1	Zoom	ソーシャルバザールについて（準備状況、プログラム構築等）
5月13日	ソーシャルバザール定例ミーティング2	Zoom	ソーシャルバザールについて（準備状況、プログラム構築等）
6月15日	ソーシャルバザール定例ミーティング3	Zoom	ソーシャルバザールについて（準備状況、プログラム構築等）

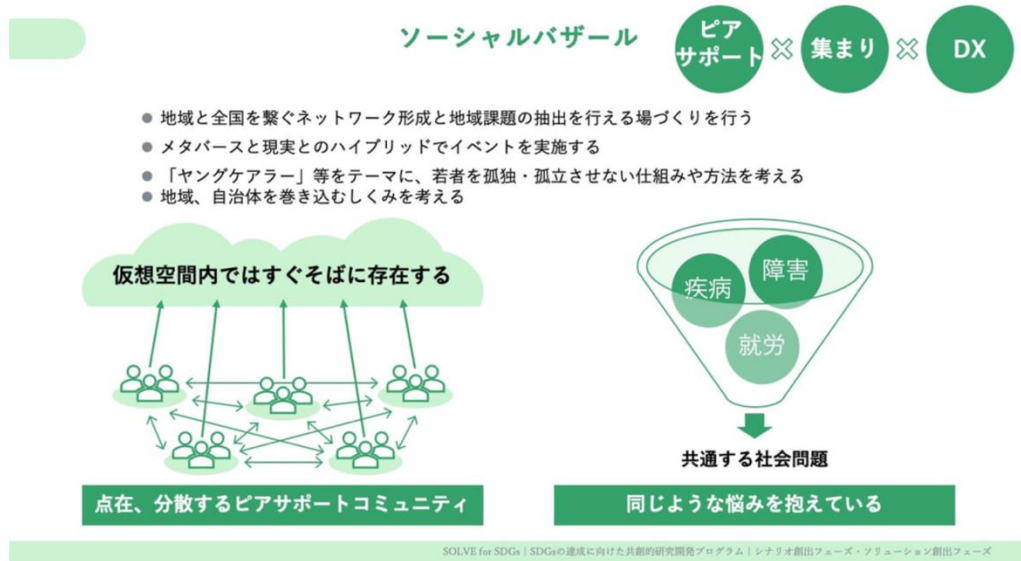
6月22日	ソーシャルバザール定例ミーティング4	Zoom	ソーシャルバザールについて（準備状況、プログラム構築等）
7月21日	ソーシャルバザール定例ミーティング5	Zoom	ソーシャルバザールについて（準備状況、プログラム構築等）
7月27日	ソーシャルバザール定例ミーティング6	Zoom	ソーシャルバザールについて（準備状況、プログラム構築等）
8月10日	ソーシャルバザール定例ミーティング7	Zoom	ソーシャルバザールについて（準備状況、プログラム構築等）
9月14日	ソーシャルバザール定例ミーティング8	Zoom	ソーシャルバザールについて（準備状況、プログラム構築等）
10月13日	ソーシャルバザール定例ミーティング9	Zoom	ソーシャルバザールについて（準備状況、プログラム構築等）
11月9日	ソーシャルバザール定例ミーティング10	Zoom	ソーシャルバザールについて（準備状況、プログラム構築等）
1月25日	ソーシャルバザール定例ミーティング11	Zoom	ソーシャルバザールについて（準備状況、プログラム構築等）
5月25日	WithUsプロジェクトミーティング	Zoom	講義の構築、協力学校との打ち合わせ、準備状況の共有
6月10日	WithUsプロジェクトミーティング	Zoom	講義の構築、協力学校との打ち合わせ、フォードバック
7月22日	WithUsプロジェクトミーティング	Zoom	講義の構築、協力学校との打ち合わせ、準備状況の共有
7月25日	WithUsプロジェクトミーティング	Zoom	講義の構築、協力学校との打ち合わせ、フォードバック
9月16日	WithUsプロジェクトミーティング	対面	講義の構築、協力学校との打ち合わせ、フォードバック
10月14日	WithUsプロジェクトミーティング	対面	講義の構築、協力学校との打ち合わせ、フォードバック
10月21日	WithUsプロジェクトミーティング	Zoom	講義の構築、協力学校との打ち合わせ、フォードバック
11月4日	WithUsプロジェクトミーティング	対面	講義の構築、協力学校との打ち合わせ、フォードバック
7月18日～21日	Cチームミーティング：帯広インタビュー	対面、帯広	ポラリス会員20名に対して実施
8月2日～4日	Cチームミーティング：福岡・大分日田インタビュー	対面、福岡	NPO学びあい会員10名に対して実施
8月17日	Cチームミーティング：研究進捗ミーティング	Zoom	帯広、福岡・日田視察報告 ピアサポートへの評価として障害福祉サービス等報酬改定がされたことの情報提供、社会的処方や患

			者市民参画 (PPI) やリンクワーカーについて情報提供
8月24日	Cチームミーティング： 研究進捗ミーティング	Zoom	ピアサポートの普及のために必要な仕掛けについて話し合い。 アンケートが当事者・医療者ともに200名を超えた
9月29日	Cチームミーティング： 研究進捗ミーティング	Zoom	インタビューを文字起こし中、アンケートを解析中 ピアサポート団体の運営では、活動継続の問題が大きい
10月17日	Cチームミーティング： 研究進捗ミーティング	Zoom	With Usで何が学生に響いたのかについて議論した。

3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

①ソーシャルバザール（帯広）

ピアサポーターが点在し、冬になるとさらに集まることに苦労する北海道帯広にて、地域（行政）と連携し、メタバースを利用して同じ悩みを共有するためのイベント（シンポジウム）を行うシナリオが「ソーシャルバザール」である。今後は地域を超えて横展開していく（他地域への展開）。



②WithUsプロジェクト（福岡）

当事者にDX教育を行い、社会復帰を後押しする役目を作業療法士、理学療法士に担ってもらうために、学生教育を行う。教育とピアサポートとデジタルを融合させたシナリオが「WithUsプロジェクト」である。今後大学などに横展開していく。

2. WithUsプロジェクトとは？（ピアサポートDX教育協議会）

- ・当事者の方々はICTの世界から遠い
- ・当事者の支援をVR業者が担当（トライアルより）



- ・ICTについて支援することが社会復帰へつながる



- ・作業療法士、理学療法士がその役を担えないか？



- ・専門学校でトライアルを経て正規カリキュラムへ
- ・未来のデジタルに強いPT、OTの育成へ。



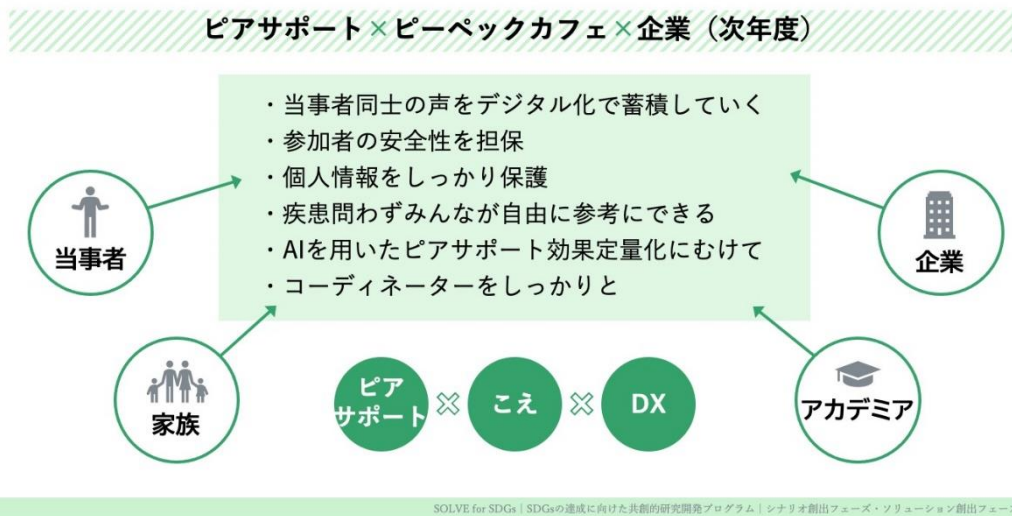
当事者の方々からの意見より発案

「WithUs プロジェクト」 講義スケジュール		
回数	月日	タイトル
0	6月10日	プレ講義（関係構築）
1	6月24日	リハビリテーションとピアサポートについて
2	7月22日	当事者と学生とのICT交流会
3	9月16日	メタバースを使っでの教育プログラム「下町キッチン」
4	10月14日	ニューミーを使った遠隔リハビリの可能性
5	10月21日	AVRを使用した未来のリハビリ
6	11月4日	学生と考えるWithUsプロジェクトの未来

③こえを“かち”にするプロジェクト（世田谷）

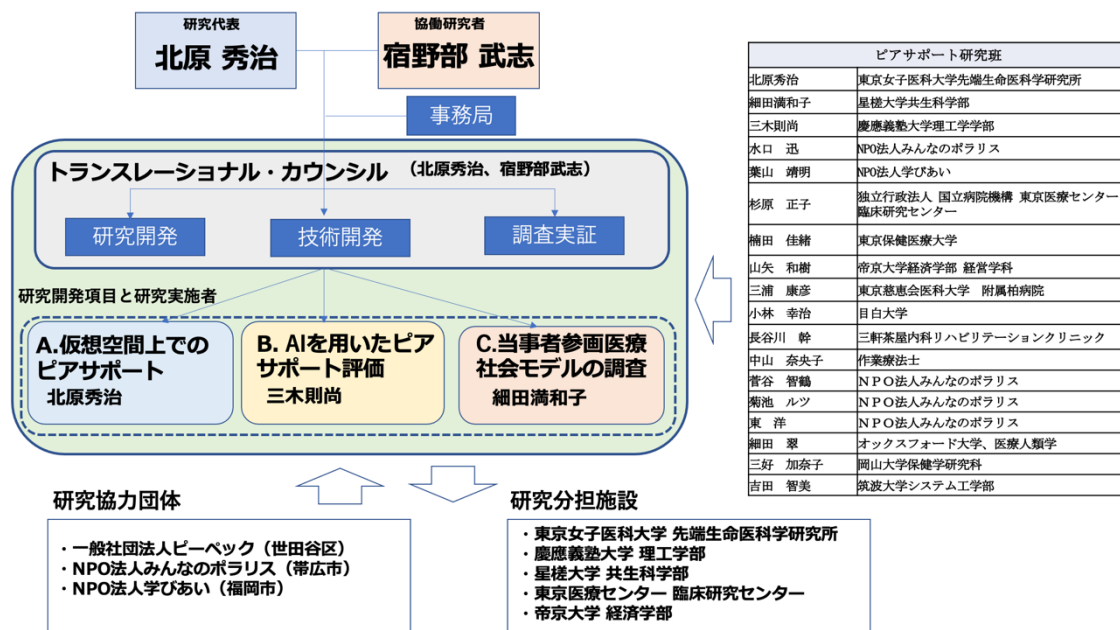
当事者の声には価値がある。だからこそ、ちょっとした困りごとから疾患の話まで、ピアサポートの会話をデジタルで蓄積し、可視化、価値づけるプロジェクト。そうすることにより行政も企業も課題を抽出することができ、当事者の声に価値がつくシナリオ「こえを“かち”にするプロジェクト」、今後他分野領域、他地域へ展開予定である。

3. 「病気をもつ人のこえを“かち”にする」プロジェクト（仮）とは？



SOLVE for SDGs | SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム | シナリオ創出フェーズ・ソリューション創出フェーズ

4. 研究開発実施体制



Aグループ

役割：仮想空間上（メタバース）のピアサポートの研究

概要：ピアサポートを仮想空間で行う環境構築と実装（可能性試験）

必要性：従来オフラインで行われてきたピアサポートを仮想空間で実施した場合の課題の抽出を行う。ピアサポート実施での共有されるナレッジを仮想空間に適応させる。

Bグループ

役割：AIを用いたピアサポート研究

概要：効果的なピアサポートの評価指標の開発

必要性：Aグループで行われるピアサポートを計量的に測定し、評価指標を開発する。

Cグループ

役割：当事者参画医療社会モデルの調査および実装計画

概要：ピアサポートの現状と実装に向けた調査

必要性：実装に向けたシナリオ構築のための基礎調査および環境分析を行い、現状を明らかにすることで、課題を抽出する。

5. 研究開発実施者

VRピアサポート開発グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
北原 秀治	キタハラ シ ユウジ	東京女子医科大学 医学部	先端生命医科学研究 所	准教授
宿野部 武志	シュクノベ タケシ	一般社団法人ピー ペック		代表理事

機械学習導入カウンセリンググループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
三木 則尚	ミキノリヒサ	慶應義塾大学	理工学部	教授
長友 竜帆	ナガトモタツ ホ	慶應義塾大学大学 院	理工学研究科	研究員
日置 遼大	ヒオキリョウ タ	慶應義塾大学大学 院	理工学研究科	M1

当事者参画医療社会モデルグループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
細田 満和子	ホソダ ミワ コ	星槎大学	共生科学部	教授

6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

6-1. シンポジウム等

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要
2022 年7月2 日	ソーシャルバザール プレイベント	NPO法 人みんな のポ ラリス	ツクイ 帯広 WOW	34	ヤングケアラーについての それぞれの取り組みを登 表。

2022 年8月8 日	ソーシャルバザール Vol.1	NPO法 人みんなのポ ラリス	ツクイ 帯広 WOW	73	ヤングケアラーについての それぞれの取り組みを登 表。帯広市長も参加。
2023 年2月4 日	ソーシャルバザール in 着物の森	NPO法 人みんなのポ ラリス	メタバ ース	25	能面・能装束展、空海の世 界展、きものアート展、ほ か、10のメタバース展示会 にて本研究の話。

6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、フリーペーパー、DVD

- ・なし

(2) ウェブメディアの開設・運営、

- ・研究チームホームページの開設。「ピアサポートのDX化による、新しい当事者参画医療社会モデルの構築に向けたシナリオの創出」、
<https://peersupportproject.weebly.com/>、2023年3月
- ・NPO法人まなびあい 研究活動 <https://manabiai.org/research>
- ・NPO法人みんなのポラリス Facebook、Twitter、Instagram

(3) 学会（7-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

- ・北原秀治、コミュニケーションを起点とする共創的エコシステムとは、サイエンスアゴ
ラ、2023年2月23日、京都

6-3. 論文発表

(1) 査読付き（1件）

●国内誌（1件）

- ・三木則尚、医療におけるSDGsをピアサポートとともに考える；④ピアサポートのデジタル化技術

J. Seizon & Life Sci., 33-2, 2023.3.

●国際誌（0件）

- ・なし

(2) 査読なし（2件）

- ・北原秀治、細田満和子、葉山靖明、ピアサポート教育のDX化、作業療法ジャーナル（vol.57(4), 377-382, 4月号 2023年）
- ・北原秀治、細田満和子、葉山靖明、ピアサポートのDX化-バーチャル空間を利用して-、作業療法ジャーナル（vol.56(12), 1258-1263, 11月号 2022年）

6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

（1）招待講演（国内会議 3 件、国際会議 1 件）

- ・北原秀治、～ICTを用いた患者・当事者支援の仕組みづくり～、大阪商工会議所例会、2022年7月26日（Web）
- ・北原秀治、当事者と共に作るリハビリDX関係、東京都医工連携HUB機構例会、2023年3月10日（Web）
- ・北原秀治、VRを用いたリハビリ支援、第11回 未来大学メディカルICT研究会、2022年7月13日（函館未来大学キャンパス）
- ・Hosoda, M., Health Policy on Non Communicable Diseases--A case in Japan, Summit of Academia Networking with Government, Allied Health & Medical Professionals : Conference on Health Systems Research & Innovation Past Reflections, Future Projections, June 2, 2023, IIT Bombay, Powai, Mumbai, India

（2）口頭発表（国内会議 4 件、国際会議 1 件）

- ・小林幸治・葉山靖明：ピアサポートをDX化した作業療法学生教育－With Us プロジェクトの取り組み－、日本作業療法教育学会（大阪、藍野大学）2022年11月20日
- ・小林幸治：患者会やピアサポートの実態と課題。医療者の参加度や意識に関するWebアンケート調査、日本リハビリテーション連携科学学会（さいたま市、目白大学）2023年3月11-12日
- ・細田満和子、葉山靖明、水口迅、宿野部武志、小林幸治、杉原正子、RTD:患者・当事者参画研究の可能性－ピアサポート研究から見えてくるもの－、日本保健医療社会学会、2023年5月28日、東京都立大学荒川キャンパス
- ・Hosoda, M., Digitizing Peer Support Activities of Brain Injury Patients, International Sociological Association Congress, June 28th 2023, University of Melbourne, Australia.
- ・細田満和子・水口迅、沖縄と北海道の脳卒中者当事者をつなぐ～JST研究事業「ピアサポートのDX化による当事者参画医療社会モデルの構築」について～、脳損傷者ケアリングコミュニティ学会、2023年6月25日、沖縄県総合福祉センター ゆいホール

（3）ポスター発表（国内会議 3 件、国際会議 0 件）

- ・小林幸治・葉山靖明：ピアサポートをDX化した作業療法学生教育－With Us プロジェクトの取り組み－、日本作業療法教育学会（大阪、藍野大学）2022年11月20日
- ・小林幸治：患者会やピアサポートの実態と課題。医療者の参加度や意識に関するWebアンケート調査、日本リハビリテーション連携科学学会（さいたま市、目白大学）2023年3月11-12日
- ・細田満和子他、変容する病人役割と医療への当事者市民参画（PPI）－ピアサポート実態調査の分析から－、ポスターセッション 111、STROKE2023（日本脳卒中学会）、2023年3月18日、パシフィコ横浜

6-5. 新聞報道・投稿、受賞等

（1）新聞報道・投稿（6 件）

- ・「コロナ禍でも患者ら交流を」朝日新聞 2022年3月2日
- ・「ピアサポート VR空間を活用 コロナ下 会えなくても対話 大学と帯広の障害者団体が実験」北海道新聞 2022年4月7日
- ・「仮想空間で障害者同士支援へ みんなのポラリス 東京女子医大など研究」十勝毎日新聞 2022年5月6日
- ・障害者、患者同士の支え合い×DX 「ピアサポート」に新たな可能性 西日本新聞 2022年11月17日
- ・ヤングケアラーの苦闘と結びつくために メタバース空間で模索した「課題解決の場」 朝日新聞社論座 2022年09月15日
- ・DXで育てる未来の作業療法士 当事者参画の新デジタル教育をメタバースが支える 朝日新聞社論座 2022年12月30日

(2) 受賞 (0 件)

(3) その他 (2 件)

- ・クロスリアリティ(XR)の世界でできること1、東京女子医科大学医学部講義「医療情報学」、北原秀治、2022年6月22日
- ・クロスリアリティ(XR)の世界でできること2、東京女子医科大学医学部講義「医療情報学」、北原秀治、2022年6月29日

6-6. 知財出願

(1) 国内出願 (0 件)

(2) 海外出願 (0 件)